養鷄大事典

增補改訂版

養鶏大事典

養鶏之日本社

執筆者（ABC順）

波多野　正	前東北大学教授・農博
今村文雄	日本養鶏協会副会長
海塩義男	東京農業大学教授・農博
加藤民雄	前山梨県住吉種畜場技師
河原　斌	元愛知県種鶏場長
鎌田浩一	農林省畜産局家畜改良課技官
川島秀雄	農林省動物医薬品検査所長・農博
経徳礼文	農林省岡崎種畜牧場技官
鬼原新之亟	東京農業大学助教授・農博
近藤恭司	名古屋大学教授・農博
草野愛子	東京農業大学助教授
松尾信一	信州大学助教授・農博
三村　一	信州大学長・農博
三浦道雄	前農林省家畜改良課長 農林省東海農政局次長
水谷一之	愛知県養鶏試験場長・農博
森本　宏	農林省畜産試験場技官・農博
村上邦夫	日本卵業協会専務理事
中村　竹	元千葉県総合種畜場長
西田周作	東北大学教授・農博
西山久吉	鹿児島大学教授・農博
大野　勇	前日本初生雛雌雄鑑別協会常務理事
佐伯祐弍	農林省畜産試験場技官・農博
斉藤道雄	日本大学教授・農博
関寺章八	農林省大宮種畜牧場長
佐々木清綱	日本大学教授・農博
佐々木　実	日本大学助教授
関　令二	農林省岡崎種畜牧場技官
芝田清吾	明治大学教授・農博
島村唯岸	関東ブロイラー協会理事
鈴木正三	東京農業大学教授・農博
高橋徳次	養鶏之日本社長
田名部雄一	農林省畜産試験場技官・農博
横倉　輝	元日本初生雛機械鑑別協会常務理事

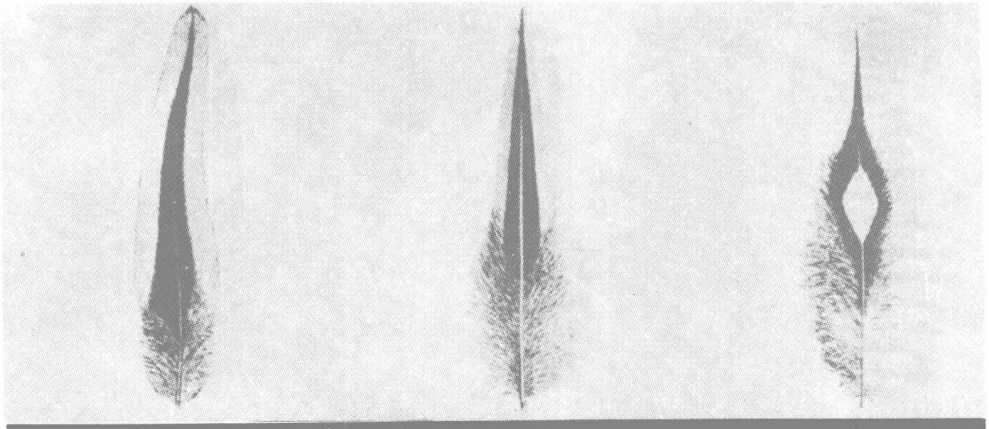
編集委員（ABC順）

今村文雄　海塩義男　川島秀雄
三村　一　佐伯祐弍　芝田清吾

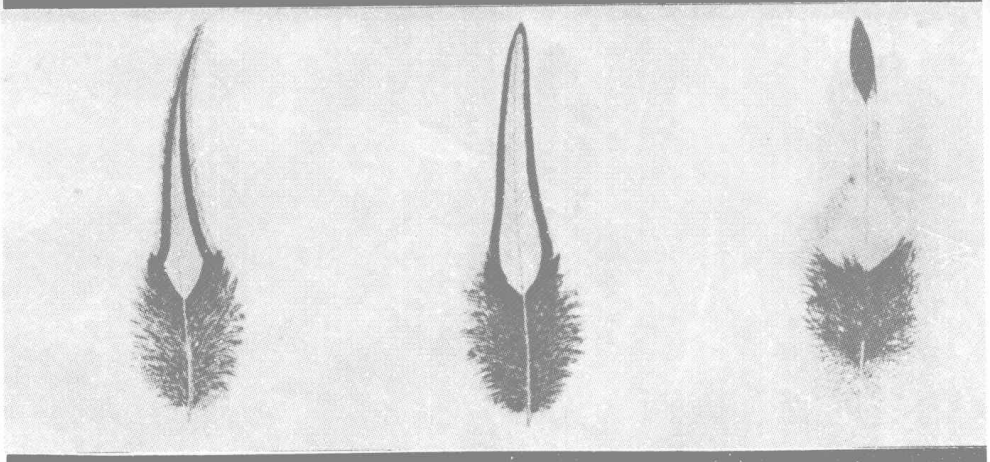
カット・匹亜会　堀尾　実

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

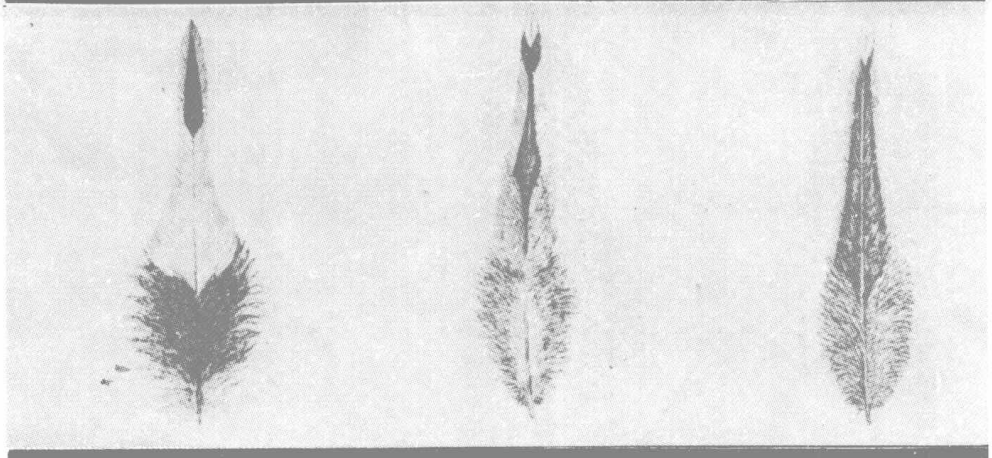
—その1— 羽毛模様各種 （家禽図鑑・三井・衣川）



1. 縦斑 雄　　2. 異色羽軸の縦斑 雄　　3. タイヤモント縦斑 雄

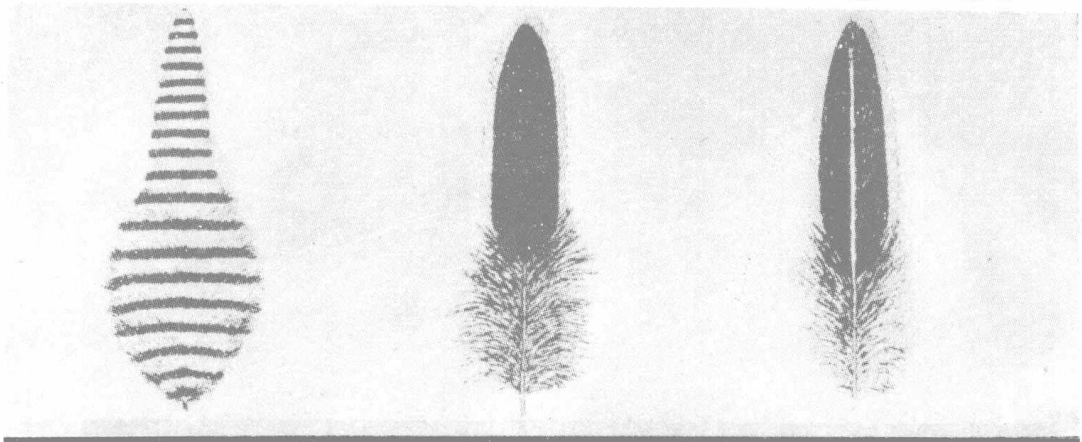


4. 複縦斑 雄　　5. 白軸 雄　　6. 点斑 雄

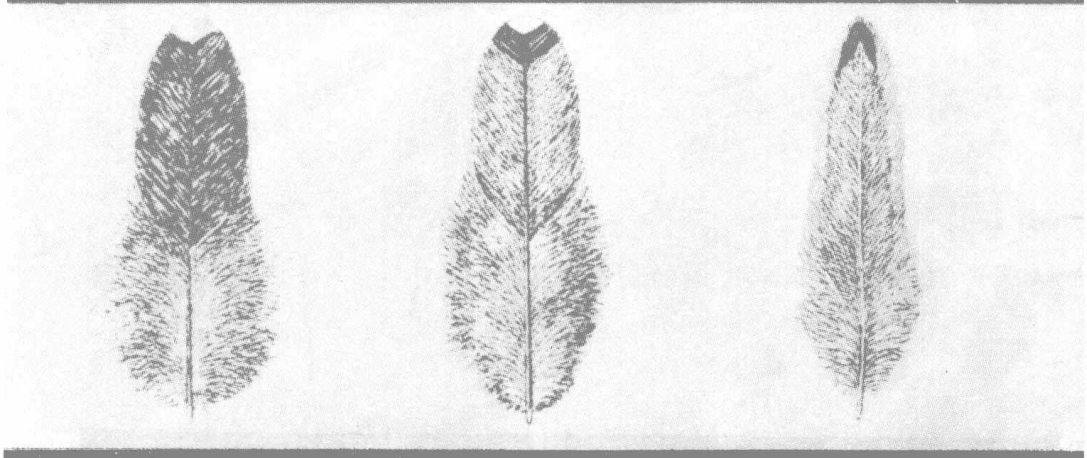


7. 抱点斑 雄　　8. 三色斑 雄　　9. 実斑 雄

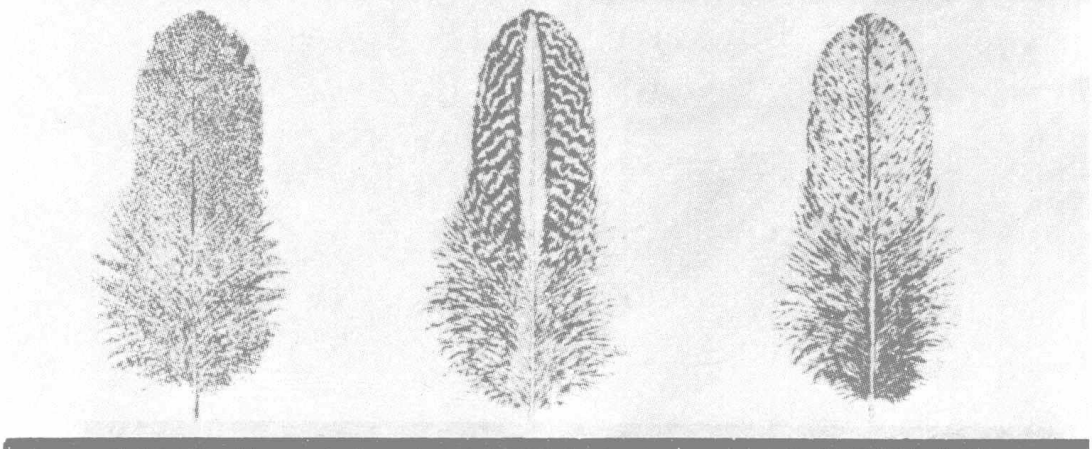
羽　毛　模 —その2—



10. 横斑　雄　　11. 縦斑　雌　　12. 異色羽軸の縦斑　雌

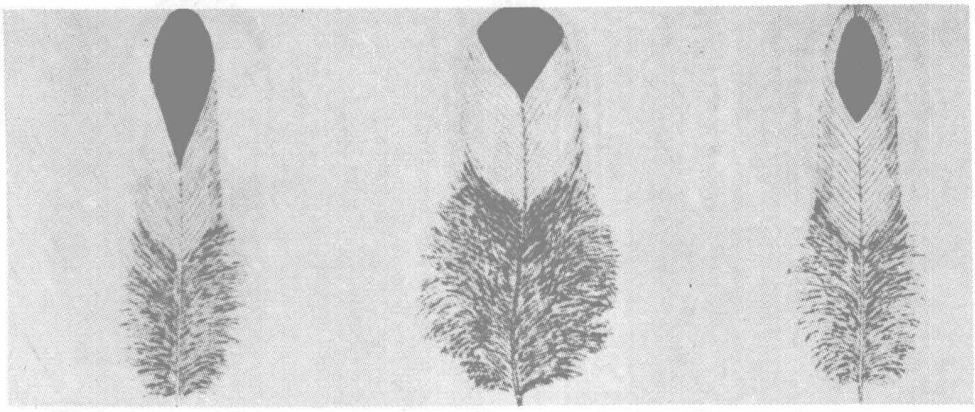


16. 尖斑　雌　　17. 三色斑　雌　　18. 小点斑　雌の頸羽下部

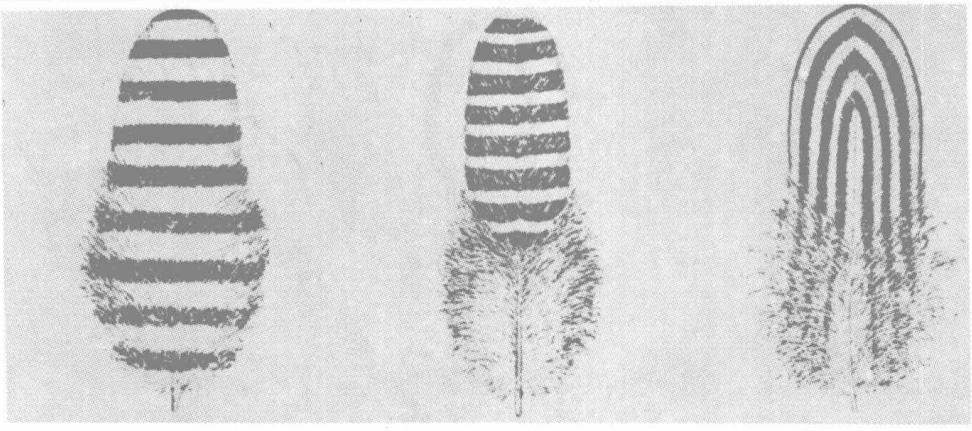


22. 梨地斑　雌　　23. 異色羽軸　欠点　　24. 粉状斑　欠点

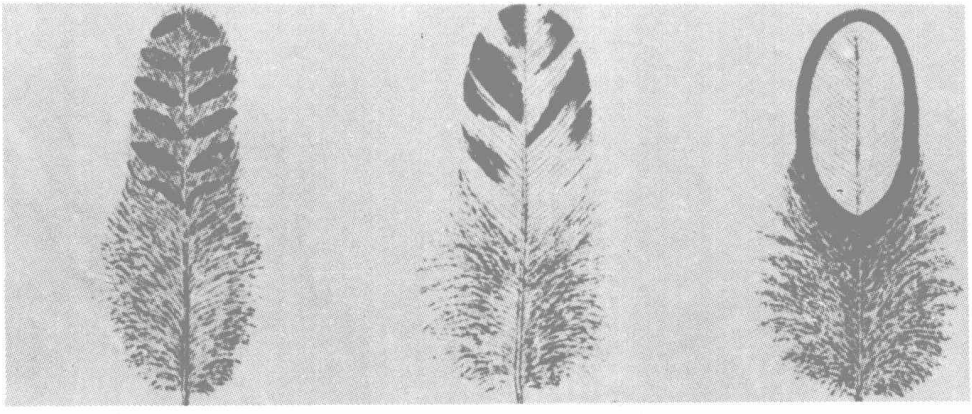
様　各　種（家禽図鑑・三井・衣川）



13. 点斑 雌の頸羽　　14. 点斑 雌　　15. 抱点斑 雌



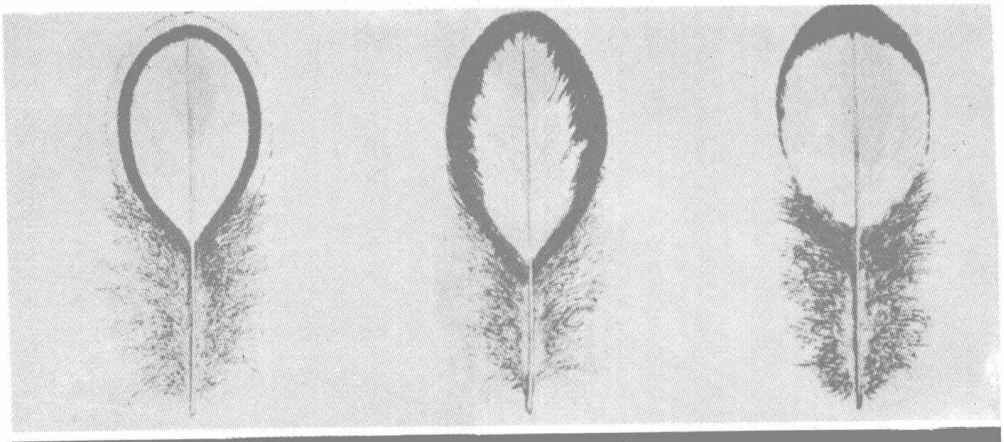
19. 横斑 雌　　20. 平行条斑 雌　　21. 弦月形条斑 雌



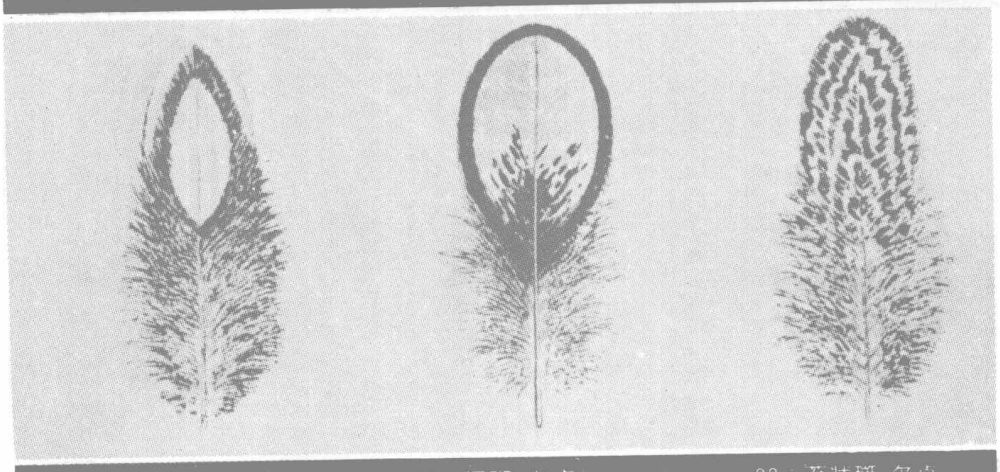
25. 羊歯斑 雌　　26. 飛白斑 欠点　　27. 濃輪 雌

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

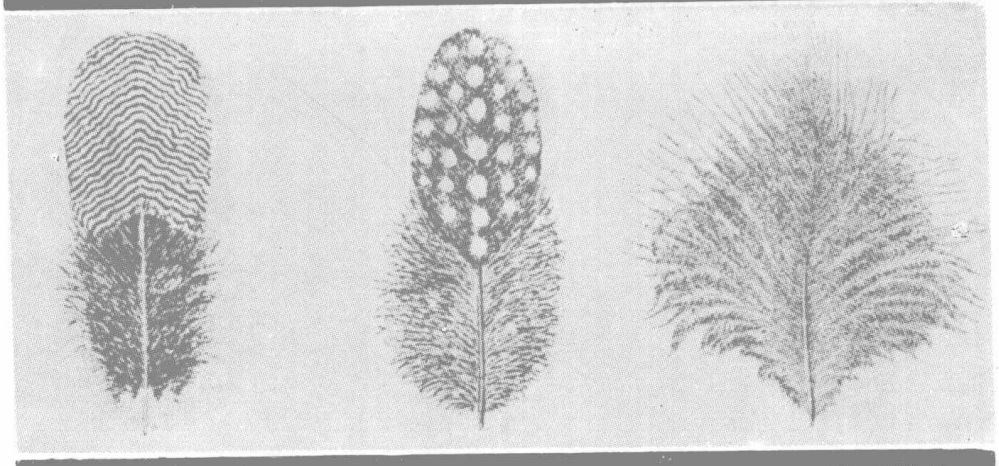
—その3— 羽毛模様各種（家禽図鑑・三井・衣川）



28. 有縁覆輪　29. 不正覆輪 欠点　30. 新月形不正覆輪 欠点



31. 霜点 欠点　32. 汚斑 欠点　33. 苔状斑 欠点



34. 波状細条斑　35. 真珠斑　36. 条状羽

序

近年わが国の養鶏は、国民食生活の向上と、農業経営の改善安定などの見地から、その重要性が強く認識されているばかりでなく、一つの企業態としても、立派な産業として成立するようになり、農家はもとより企業養鶏家などにより、集団養鶏や企業的大養鶏などが各地に起り、養鶏熱が各方面に高まりつつあり、生産もここ数年来急速な進展ぶりを示している。この間品種改良を始めとし、飼養技術、飼料、衛生および経営方法などの研究も急速に進められている。

今後の養鶏は、一層その生産性を高めるために養鶏の企業化、集団化が提唱され、経営規模を拡大して高度の技術を採り入れ、経営を合理化することが強く要請されている。従来の日本の養鶏から、世界の競争場裡において立派に諸外国と太刀打できる養鶏とならねばならぬ時代となったのである。

このときに当り、養鶏之日本社の企画により、わが国養鶏界に関係ある各方面の学者、技術者の第一人者のみを揃え、おのおのその専門分野よりわが国養鶏の進むべき途を記述された本書を、養鶏関係各方面に送らるることは真に喜ばしいことで、必ずやわが国養鶏界の進展のため寄与すること大なるものがあるを信じ、敢て広く推奨する次第である。

日本養鶏協会顧問
日本養鶏農業協同組合連合会会長
伊藤雛吉

序

養鶏は他の畜産業よりも歴史的に見て、わが国で最も古くから行われた産業であることは確かである。このことは日本の暦において、鶏が十干十二支のうちに加えられていることでも判るし、世界に誇る日本鶏の存在することでも判る。一方日本人の食生活において卵焼きなど古くからあったことでもいろいろ想像できる。

したがってニワトリは早くから日本人の生活に結ばれて、縁の深いものであるが、それに加うるに日本人の手先の器用な技術力は、鶏のような小動物を良く慣致して、今日の発達を起すに至ったもので、養鶏は世界的に見て第3位に達するといわれるのも当然の理由があるものと思える。

しかし遺憾なことは日本の農業が2千年も続いて「米麦農業」に終始し、米作りに非ざれば農業でないと考えるに至ったことである。そして「阿呆の鶏飼い」などの言葉が現われ、米麦農業には知脳をつくし、鶏には知脳を使わなくても良いと考えたものであつた。これは日本農業のただ一つのミスであったと思われる。これは一方において養鶏が、米麦農業の副業的存在として利用することだけを知って1戸、5，6羽からせいぜい100羽程度の規模しか考えなかった時代の産物である。

今日では米麦農業と養鶏の位置は、まさに逆転しようとしている。専業養鶏家は勿論のこと、副業として米麦農業と平行して養鶏をやる農家でさえも1人 1,000羽を飼うことは楽なことになった。しかしこれには高度の知識を要する部門となってきた。

世界の情勢を見ても養鶏は、最も近代的産業の一つとなり、最も進歩した知脳と技術を必要とする典型的事業となった。その品種の改良においても、鶏の管理技術においても、機械化経営の進歩においても、またこれに関連す

る飼料工業の急激なる発達においても、知脳人でなければ成功しえない方向に進んできたのである。例えば新聞で報ずる如く、例をブロイラー産業にとって見ても、食鶏の屠殺、検査、解体、脱毛、内臓除去、洗滌、仕上などが一貫した機械で動き、1時間に数千羽の食鳥が処理できる処まで発達して来たことを知るのである。そして人手を以ては到底なし得ない立派な仕上げを機械でするに至ったのである。一流の発明家、一流の技術を総合しなければ達し得ない処まで、広義の養鶏事業は発展してきたのである。

かくの如く、養鶏は智脳を必要とする産業であるから、今後日本の養鶏家は旧態を脱ぎ捨て、世界的水準の新しい技術と経営法に取組まねばならなくなった。それに加うるに、貿易の自由化は迫り、日本の養鶏家は、好むと好まざるとに拘らず、世界的競争の渦中に立たざるを得なくなった。したがって一にも二にも、新知識の獲得は焦眉の急となってきた。

この時に当り、養鶏之日本社では、新しい知識を登載した養鶏大事典を50周年の記念出版として発刊せられると聞き、万腔の賛意を表し、大いに江湖に推奨したいと思う次第である。

前日本畜産学会長
日本科学飼料協会長
斉　藤　道　雄

発刊のご挨拶

私が養鶏界に入ったのは、大正8年の昔であります。振り返ってみると、当時の養鶏がいかに原始的で幼稚であったかをつくづくと感じさせられ、それだけ今日の養鶏科学の進歩にただただ驚嘆させられるばかりです。それで私は、この現代の養鶏科学知識を集大成し、多年従事してきた活字文化を通じての使命を果したいと、常々念願しておりました。

たまたま37年の2月、芝田博士のご来訪をうけ、ふと平素の希望をお話しましたところ、即座に共鳴していただきました。

時あたかも本社創業50周年も近づいている折柄、記念事業の一つとして『養鶏大事典』の出版を実現し、多年ご支援とご協力を賜った諸先輩に対しても、聊か報恩の志を具体化致すこととなりました。かつこの『大事典』を通じて、将来わが国養鶏界の発達を祈念する意味で、発刊企画が進められました。

早速数次の会議を終て、まず数氏に編集委員をお願いし、次々とついに30余名に及ぶ諸先生に原稿のご執筆をご依頼申上げました。

これら執筆各位は全国にわたっており、本社と印刷所とは遠隔であり、相互の連絡資料の蒐集などに、予期以上の困難を生じ、難航に難航を重ねて、約2カ年の歳月が費されてしまいました。

幸にしてここに完成の日を迎えることができました。改めて執筆諸先生並びに挿画の転載をご承諾下さった三井高遂・衣川義雄・村松弥幸3氏、写真の撮影・複写・貸付に関しご協力、便宜を与えられた各孵卵場、飼料会社、養鶏場、養鶏関係者各位のご厚情と、編集出版関係者のご協力に対して深甚なる感謝の意を表します。

この新しい科学に立脚する『大事典』が、わが国養鶏界発展の基盤となってご奉仕できますように心からお祈りいたします。

養鶏之日本社長

高　橋　徳　次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com